



これらの写真は夜の暗がりの中、懐中電灯を用いて撮影した。懐中電灯係として活躍したのは、2017年以降、毎年取材に同行している私の二人の子供たち——5歳と3歳——だ。彼らは実に自由に走り回りながら、被写体を照らしてくれた。そうしてこれらの作品が出来上がった。つまりこの作品は、私たち親子にとっても「母と子の肖像写真」なのだ。

## 小松由佳 写真展 シリア難民 母と子の肖像

2021

12月10日（金）—12月16日（木）

平日…10時30分—19時

土日…11時00分—17時

（最終日 14時まで）

○ギャラリートーク

各20分。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、

開催を中止する場合があります。

12月10日（金）／12月11日（土）／12月12日（日） 13時00分—

\*本写真展では、「母と子の肖像」（モノクロ展示）のほか、

シリア難民の生活風景（カラー展示）も展示いたします。

アラビア半島に位置するシリア・アラブ共和国（通称シリア）は、古くから文明発祥の地として知られ、古くからアジアとヨーロッパとを繋ぐ要衝として栄えてきた。

2011年、半世紀にわたる独裁体制の改革を訴える民主化運動と、それを弾圧しようとする政府軍が衝突し、シリアは内戦状態に突入する。各地で武力衝突が繰り返され、国土は荒廃し、560万人近い人々が難民となった。今年で内戦から10年。未だ終息の兆しは見えない。

シリアを離れた難民の多くはトルコ、レバノン、ヨルダンなどの周辺国に暮らしており、その7割がトルコに集中している。

難民になるということは、既存のコミュニティだけでなく、生活基盤を失うことでもある。文化や言語さえ異なる異郷で、経済的な自立を手に入れるのは容易ではない。劇的に変化した環境のもと、人々は困窮に喘ぎながら、難民という脆弱な立場で生きている。

本展示は、トルコ南部に暮らすシリア難民の、母と子の関係性に焦点を当てたものである。ここに登場するのは、難民特有とも言える複雑な背景を持った母と子だ。なかには子を失った母や、母を失った子もいる。彼らは自分が母であること、また

是孩子であることにより、彼ら自身が生かされ、生きようとしている存在でもあった。そこに母と子の、揺るぎない関係性を垣間見ることができる。

これらの写真は夜の暗がりのなか、懐中電灯を用いて撮影した。懐中電灯係として活躍したのは、2017年以降、毎年取材に同行している私の二人の子供たち——5歳と3歳——だ。彼らは実に自由に走り回りながら、被写体を照らしてくれた。そうしてこれらの作品が出来上がった。つまりこの作品は、私たち親子にとっても「母と子の肖像写真」なのだ。

懐中電灯の灯りに浮かび上がるのは、彼らの「生」のごく一面にすぎない。しかしそこに、複雑で、曖昧で、不安定な、難民としての境遇そのものが内包されている。人間の目は、目に入りやすいものを通し、対象を理解しようとする。だが、光のあたらない漆黒のなかにも目を向けてみたい。そこに確かに存在し、呼吸しているものがある。

本写真展は、シリア難民の母と子、それぞれの物語を通し、目に見えにくい領域のなかに彼らの姿を可視化したいという試みである。それにより、内戦が人々にもたらしたものについて考えるきっかけになれば幸いである。

懐中電灯の灯りに浮かび上がるのは、彼らの「生」のごく一面にすぎない。しかしそこに、複雑で、曖昧で、不安定な、難民としての境遇そのものが内包されている。



## 小松由佳 写真展 シリア難民 母と子の肖像

2021.12.10（金）— 12.16（木）

平日：10:30 — 19:00

土日：11:00 — 17:00

（最終日 14:00 まで）

○ギャラリートーク

各 20 分。新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、開催を中止する場合があります。

12.10（金） / 12.11（土） / 12.12（日） 13:00—

# FUJIFILM

### 富士フォトギャラリー銀座

〒104-0061  
東京都中央区銀座1丁目2-4  
サクセス銀座ファーストビル4F  
クリエイティブ本店  
TEL. 03-3538-9822

- 東京メトロ銀座線「京橋駅」  
3番出口より徒歩1分
- 東京メトロ有楽町線「銀座一丁目駅」  
7番出口より徒歩1分
- JR「有楽町駅」  
京橋口より徒歩5分

※祝花は固くお断り申し上げます。

※写真展・イベントはやむを得ず中止・変更させていただく場合がございます。予めご了承ください。

